

属格標識'sの発達と(脱)文法化

茨木正志郎

1. 属格標識'sの起源

現代英語の属格標識'sの起源には、古英語・中英語の属格接辞(-e)sからの発達であるという意見(Allen (2008), Fischer (1992)など)が一般的であるが、his 属格の所有代名詞 his が縮約されて'sになったという意見(Taylor (1996), Amano (2003))もある。しかし、Table 1 に示す PPCME2 と PPCEME を用いたコーパス調査の結果より、his 属格からの発達という説は深刻な問題に直面する。

Table 1. his 属格と属格接尾辞、's 属格の分布

	M2	M3	M4	E1	E2	E3
his 属格	1 (0.8%)	211 (21.0%)	35 (3.4%)	5 (0.5%)	27 (3.0%)	14 (1.8%)
屈折接辞(-e)s	123 (99.2%)	1003 (79.0%)	987 (96.3%)	795 (83.8%)	664 (73.4%)	361 (46.4%)
's 属格	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (0.3%)	149 (15.7%)	214 (23.6%)	403 (51.8%)

(M1: 1150-1250, M2: -1350, M3: -1420, M4: -1500, E1: -1570, E2: -1640, E3: -1710)

Table 1 より、中英語、初期近代英語を通じて、his 属格の割合が非常に少ないことが分かる。M3 期に 211 例 21%まで増加しているが、それらのうち 210 例が John Trevisa's Polychronicon からの事例であった。このテキストの筆者は 2 人であることから、この時期に his 属格の使用が普及しているとは言い難い。一方、屈折接辞はどの時期を通しても豊富に観察され、さらに、's 属格との相関関係も観察される。つまり、E1 期に's 属格が 15.7%まで増えると屈折接辞の属格の割合も 12.5%減少している。E2 期では's 属格の割合は 23.6%まで増え、屈折接辞の属格は 73.4%まで減少し、さらに E3 期には、's 属格が 51.8%、屈折接辞が 46.4%となる。これら一連の出現率の変化は密接に関わっており、's 属格が屈折接辞の属格に取って代わったことを示唆している。

2. 格付与の変化と D 要素としての's

本論では属格は内在格付与から構造格付与に変化したと仮定する。具体的には、古英語・中英語では Chomsky (1986)での一様性の条件のもと属格名詞は θ 役割付与と共に格が付与される。初期近代英語になると、属格標識's が格付与子として D 主要部を占めるようになり、's が構造格を属格名詞句に付与するようになった。

内在格付与から構造格付与に変化した証拠として、大村 (1995)では、中英語から初期近代英語に出現した場所や時間の属格をあげている。場所や時間の属格は θ 役割とは関係がなく、一様性の条件による内在格付与が衰退したことを意味している。また、大村 (1995)は、初期近代英語に発達した動詞的動名詞の出現は、N による内在格付与が衰退し、D による構造格付与が台頭してきた証拠であると主張している。

属格標識's が D 主要部を占めている証拠として、群属格の発達がある。古英語では、属格名詞句が 2 つ以上の名詞から構成されるとき、(1)のようにそれぞれの名詞が属格接辞を持つ。

(1) *Ælfredes cyninges godsunu* 'king Alfred's godson' (ChronA 82,10 (890))(小野・中尾 (1980: 292))

古英語後期より属格を含む屈折接辞は次第に水平化され始め、その結果、(2)に示すように、群属格において属格接辞は 2 番目の名詞のみが持つようになった。

(2) *David kinges kinn* 'king David's kin' (Orm)(中尾 (1972: 221))

初期近代英語までに群属格の用法は確立し現代英語では様々な種類の群属格を形成するようになった。

(3) *the King of Perseas crown* 'the king of Persia's crown' (Marlowe, *Tamb.* 651)(荒木・宇賀治 (1984: 284))

(4) a. *Fred's taste in wall paper is appalling.*

b. *The man in the hall's taste in wall paper is appalling.*

c. *Every man I know's taste in wallpaper is appalling.*

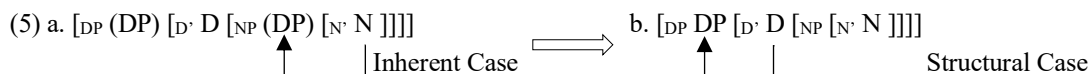
d. *That brother-in-law of mine that I was telling you about's taste in wallpaper is appalling.* (Anderson (2008: 2))

ここでの群属格の発達は、's が D 主要部を占めるようになったことを示唆している。つまり、属格名詞句は DP 指定部に位置し、その名詞句全体に D 主要部の's が付着して群属格を形成していると考えられる。

ここでの分析は、なぜ属格の'sのみが現代まで生き残ったのかという疑問にも答えを与える。つまり、屈折接辞であった'sは、主要部 N の役割を引き継いで格付与子となり、構造格を付与するために生き残る必要があったのである。

3. 構造分析と（脱）文法化

ここまで、属格標識'sは属格接辞から発達し、属格付与は内在格から構造格になり、'sは格付与子としてD主要部になったことを見た。これらをまとめると、属格構造の発達は(5)のようになる。



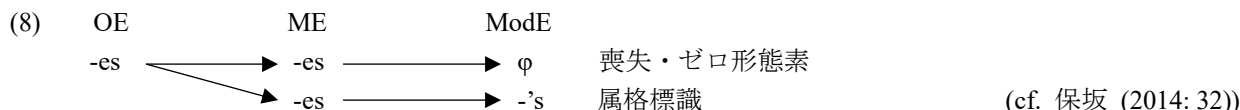
(5a)において、属格名詞句は主要部 N から内在格を受け取った後、DP 指定部へ移動する。この移動は Ibaraki (2009)によって提案されている定性の認可条件のためである。

(6) Definite noun phrases are licensed iff the [+definite] feature of D enters into a checking relation with its matching element(s) in a Spec-head and/or a head-head configurations. (Ibaraki (2009: 84))

属格標識'sの発達は脱文法化 (degrammaticalization) の事例、あるいは文法化の一方向性の反例としてしばしば言及される。文法化とは、言語の通時的な変化の中で起こる現象を指し、名詞や動詞などの語彙的意味を持つ内容語が、助動詞や前置詞などの文法的役割を果たす機能語になることを指す。文法化と呼ばれる現象に対し Hopper and Traugott (2003)は(7)のラインを提示し、変化は内容語から機能語へ、さらに接語や屈折接辞になるという方向性があり、その逆の変化はない、と主張している。

(7) content item > grammatical word > clitic > inflectional affix > loss/zero

英語の属格標識の発達は、(7)のラインにおいて、屈折接辞 (inflectional affix) から接語 (clitic) への変化としてみなされ、この変化は一方向性の反例としてしばしば取り上げられる。しかし、生成文法の枠組みにおいて、属格標識'sの発達は、(5)のような統語構造上の再分析として分析される。このような再分析に関して、保坂 (2014)は、名詞の屈折語尾が D 主要部という機能的要素へ向かうという観点からみれば、's の変化は文法化の一方向性に包含されると主張し、属格標識'sの発達過程を(8)のように示している。



古英語で属格語尾だった-esは、中英語に属格標識として再分析され現代まで残る一方、属格語尾は近代英語に、他の屈折接辞と同じく消失することが示されている。つまり、ここでは中英語から近代英語にかけて2つの変化がある。1つは接尾辞の消失である。接尾辞の消失は(7)のラインにおける inflectional affix から loss/zero への変化で一方向性に従った変化である。もう1つは属格標識'sの発達であり、これは(5)での N 要素から D 主要部への再分析である。この再分析は、Roberts and Roussou (2003)での、文法化を構造の高い位置への再分析とする定義とも一致している。したがって、属格標識'sの発達には2つの側面があるが、接辞の消失は一方向性に違反しておらず、属格標識'sの発達も Roberts and Roussou の枠組みで文法化の事例としてとらえることができる。

参考文献 : Allen, Cynthia L. (2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford University Press, Oxford. / Amano, Masachiyo (2003) "On the Historical Role of the His-Genitive in the Development of 'S," *Studies in Modern English: The Twentieth Anniversary Publication of the Modern English Association*, 95-108, Eichosha, Tokyo. / Anderson, Stephen R. (2008) "The English "Group Genitive" is a Special Clitic," *English Linguistics* 25, 1-20. / 荒木一雄・宇賀治正朋 (1984) 『英語史 IIIA』 開拓社, 東京. / Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York. / Fischer, Olga (1992) "Syntax," *The Cambridge History of English Language*, Vol. II, 1066-1476, ed. by Norman Blake, 207-408, Cambridge University Press, Cambridge. / Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott (2003) *Grammaticalization*, 2nd ed., Cambridge University Press, Cambridge. / Ibaraki, Seishirou (2009) "The Development of the Determiner System in the History of English," *English Linguistics* 26, 67-95. / 保坂道雄 (2014) 『文法化する英語』 開拓社, 東京. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs (2004) *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia. / Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani (2016) *The Penn Parsed Corpus of Modern British English, Second edition* (PPCMBE2), University of Pennsylvania, Philadelphia. / 小野茂・中尾俊夫 (1980) 『英語史 I』 開拓社, 東京. / 大村光弘 (1995) 「英語史における属格付与子の変遷について」『近代英語研究』第11号, 47-62. / 中尾俊夫 (1972) 『英語史 II』 開拓社, 東京. / Roberts and Roussou (2003) *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*, Cambridge University Press, Cambridge. / Taylor, John R. (1996) *Possessive in English: An Explanation in Cognitive Grammar*, Clarendon Press, Oxford.